

コミュニティによる災害経験伝承と 減災との関係の一考察

—インドネシア・スマトラ島インド洋沿岸地域および諸島の事例を中心に—

高藤洋子（アジア地域研究所・特任研究員）

1 はじめに

海は我々人類に大いなる恵みをもたらす一方、大きな災禍をももたらしてきた。海に生きる人々や海洋を往来する船舶の乗組員たちが自然災害によって命を失った悲しい話は多く伝えられている。有史以来、自然災害によってもたらされた甚大な被害を直視した先人たちは大自然の脅威に目を見張り畏敬の念を抱き生きてきた。人類は何世紀にもわたり科学技術を蓄積し、自然災害に向き合う防災技術も発展させてきた。今日我々は自然災害による被害を軽減するため、技術の粋を集めた高度な防災技術を手に行っているが、さらに重要なことは我々ひとりひとりが、災害が起こることを想定し常に対応を考えることである。科学技術が極めて発達した現在も、自然がもたらす災害を全て回避することは困難であるからだ。

海域沿岸で発生する地震災害で留意しなければならないのは死者の多くが津波によって命を落していることである。過去に津波は幾度となく発生している。なぜ繰り返し発生しているにもかかわらず多くの人が津波の被害により命を無くしてしまうのか。巨大地震や大津波などは発生周期が長いので、次の発生時には世代が替わっているということも考えられる。甚大な災害に見舞われても時間が経過するにつれ、人々の間で防災意識が薄れつつある面もあると考えられる。自然の威力に対しあがえない場合が多いのは当然のことと自覚はすべきであるが、自然と共に生きてきた先人たちが残した知恵によって多くの命が救われた事例があることもまた事実である。その知恵とはいかなるものであろうか。

筆者のフィールドであるインドネシアで2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震・インド洋大津波（以下、「スマトラ沖地震津波」）は、インド洋に面した12カ国に被害がおよび人類が目撃した歴史的な自然災害の一つとなった。特にインドネシアの死者、行方不明者は17万人にも上ったが、この未曾有の大災害の背景には、住民の地震や津波についての知識が十分ではなく、避難訓練なども行われていなかったことがあげられる。筆者はこれまでの研究においてスマトラ沖地震津波において甚大な被害のあった北スマトラ州ニマス島と、犠牲者の少なかったアチェ州シムル島との比較調査を行った。その結果、スマトラ島の南西に位置しニマス島よりもさらに震源地に近いシムル島が、同様の津波に見舞われたにもかかわらず犠牲者がニマス島に比べてはるかに少なかったのは、1907年に同島を襲った大津波の教訓が語り継がれ、住民が地震発生後にいち早く避難できたからであることを明らかにした。

それらの研究成果をふまえて、当該研究ではさらにインドネシアの他の被災地における災害経験伝承にみる教訓や災害知の継承のされ方、および災害をめぐる生活や文化のあり方などをとらえ、災害文化の全体像を究明することを目的とした。わけても「インド洋海域」に面したインドネシアのスマトラ島西海岸地域および周辺の諸島に焦点をあてフィールドワークを実施した（図1-1および図1-2）。研究対象地域は幾つものプレートが重なり合っている場所で、過去にも大きな地震が発生している。なおスマトラ北部西方沖では、2004年の約7年後の2012年4月にマグニチュード8.6の地震が発生している。また、地震および津波発生から11年を過ぎた現在も依然大小含め地震が多発している。研究対象の各地域において、過去の主な地震および津波発生歴を各地の統計局から収集、その地域に残る自然災害に関する民間伝承および災害経験伝承を聞き取り調査やアンケート調査によって収集した。

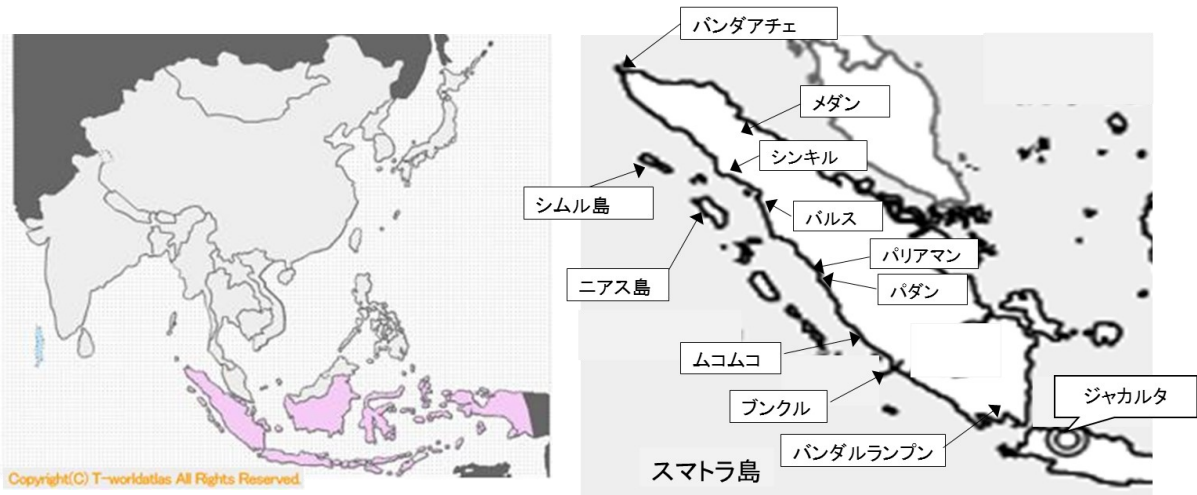


図 1-1 インドネシア全図

SEKAICHIZUをもとに筆者作成

図 1-2 スマトラ島西海岸 調査・研究対象地域

SEKAICHIZUをもとに筆者作成

各地でのアンケート調査の設問には回答者の過去の災害経験伝承に関する実態について把握できるように以下の内容を質問事項とした。

- ①災害経験伝承を知っているか ②誰から聞いたか ③誰に伝えたか ④伝承の内容

また、聞き取り調査は、アンケート調査では記載されないような、地域住民の過去の災害の経験やそこから得られた教訓や伝承の内容を、調査者との対話によって呼び起こし収集し分析することを目的とした。さらに調査の結果は調査対象地域において公開し、当該地域で受け継いでいくべき先人の知恵を住民と共有し考察するためのワークショップを開催した。

本報告書では主に収集した災害経験伝承の内容をまとめる。最終的には災害経験伝承の収集から、その分析を経て、ひとつの防災手法として社会へ応用することを考えているが、本報告書は研究成果の一部であり、まだ道半ばである。しかしながら、3年間をかけて収集した当該各地の災害経験伝承は、インドネシアのみならず、ひいては日本における防災手法を確立する一助になるものと思われる。本研究が地震多発国の両国に示唆を与えることになれば幸いである。

以降の各項では対象地域での調査結果の概要を述べる。

2 アチェ州

2-1 シムル島

シムル島はインドネシア、スマトラ島南西沖のインド洋に浮かぶ島でアチェ州に属する。スマトラ沖地震津波において最大の被害があったアチェ州西スマトラ県ムラボーからおおよそ160キロメートル 沖合に位置する。この地域で着目したいのはスマトラ沖地震津波においてシムル島の物的、経済的被害は甚大であったが、命を落としたのは7名にとどまったという事実である。

スマトラ沖地震津波の発生によりアチェ州の州都バンダアチェやムラボーおよび北スマトラ州ニアス島で多くの犠牲者が出たのに対し、シムル島では同様の大津波にもかかわらず犠牲者が非常に少なかったのは同島において1907年に発生した地震・津波の災害経験が100年もの間「Smong (スモン)」という言い伝えとなって語り継がれ、住民が避難方法を知っていたためであった。インドネシアの人々はそれを「Smongの奇跡」と呼んでいる。

1907年に発生した地震や津波被害に関する記録は見出されていないが、シムル島で実施した聞き取り調査によりその凄まじさがわかる証言を得ることができた。1907年の地震・



写真1 1907年の津波発生の際に海岸から流されたと語り継がれている珊瑚礁（シムル島西部トゥパ郡ナイボス地区）



写真2 「1907」と津波発生那年が刻まれた墓石（シムル島西部トゥパ郡サルール地区）

津波の際に島で最大の被害が出たと言われている西部トゥパ郡サルール地区に住む最高齢の女性ルキア氏の話によれば、「津波によって流されてきた大きな魚が大木に何日間もかかったままだった。」と両親から聞かされたという。また同郡ナイボス地区には1907年発生の津波によって海から流されてきたと語り継がれているサンゴ礁が今でも海岸から800メートルほど離れた水田に残されている（写真1）。

さらに島の7割近くの住民が亡くなり、島から突然人がいなくなってしまったかのようにだったと語り継がれている。先に述べたサルール地区のモスク近くの墓地には犠牲者が多く埋葬されたとのことである。そこには「1907」と刻まれた墓石が残っている（写真2）。これらの証言などから1907年の地震・津波災害の被害が相当大きかったことが推測できる。このような大きな被害がシムル島の住民に「Smong」を伝承し続けようとの決心させたとも伝えられている。Smongはシムル語で「津波」を意味する。島に伝わるNandong（ナンドン）と呼ばれる叙事詩によって受け継がれたこともあれば、子守唄に形を変え美しいメロディーと共に代々歌い継がれてきたこともあった（写真3）。内容は要約すれば、「地面が動いた時、また海面が下がり、潮が引いた時には、速やかに高台に避難しなさい」というものである。



写真3 田植えの休憩時に孫に「Smong」を歌って聞かせている様子。「Smong」は子守唄としても伝承された。

調査により「Smong」の言い伝えは約100年前の1907年に発生した地震・津波災害の時より代々、確実に伝えられていたことを明らかにした。シムル島は村と村との間が遠く離れていたにもかかわらず、ほぼ全ての人々にその言い伝えが引き継がれていた。住民たちはこの「Smong」を田植えや刈り入れの際の休憩時に、また漁業に携わる者は漁場から漁場へと移る際に口ずさんだりした。さらにクローブ（丁子）やココナツの収穫時にも歌ったりした。「Smong」は常に住民たちの生活の中に息づいていた。そのため、住民たちは地震発生後直ちに高台に避難することができた。

100年もの間語り継がれてきた伝承「Smong」とはどのようなものなのか。

ここではシムル島において多くの命を救った「Smong」の言い伝えを歌にしたもの（一例）を紹介する（資料1）。この「Smong」はシムル島の中でも多くの人に親しまれている代表的な歌詞である。口承されてきた「Smong」は時代によって歌詞の内容が変化してい

る。また、同じ島であっても地域によって異なる言語^{*1}が使用されているため、その歌詞や旋律は多様性に富む。共通していることは歌詞が押韻の形式をとっていることと「地震発生後直ちに高台に避難する」ことがキーワードとしてどの「Smong」にも同様に盛り込まれていることである。

次にシムル島の「Smong」についての特徴をみていく（資料1参照）。

読み返すことのできる文字がなかった時代に情報伝達（コミュニケーション）の媒体として唯一存在した話し言葉・音声は、その役割として聞き手の耳から入り、聞き手の心にまで届くほどの強烈な印象を与えるものである必要があった。「話し言葉」は情報を伝達する媒体として使われ、個人と個人を結びつける重要な役割を担い、話し手と聞き手との交流によって伝えられ、長い時を経て伝承されていく間に、語りに合った性質（小沢俊夫1978）を獲得してきた。口承文芸において最も重要な要素の一つに「音」や「韻」が挙げられる。「音」の強弱で何を最も伝えるべきかが明確になり、句の語尾に規則性を持たせる「押韻」によって人々の記憶の中に留まりやすいよう工夫がなされ長い年月が経った今もなお受け継がれている。そこには読み返すことのできる文字とは異なる口承で伝えるための仕掛け、すなわち口承文芸に備わるいくつかの特徴（マックス・リュティ 小沢俊夫訳1968）を見ることができる。

「Smong」（資料1）の始まりには、「津波、それは君たちの水浴びの水」、「地震、それは君たちのゆりかご」、「雷、それは君たちの太鼓の音」、「稲妻、それは君たちのともし火」というように類似したフレーズが4回繰り返されている。そのフレーズには結語として *dumek mo*, *uwakmo*, *keudangmo*, *suluhmo* という4つの単語が使われているが、すべて語尾は *o* で揃えられており、「韻」を踏んだ構成になっている。その次の4フレーズの結語は *surito*, *semonan*, *fano*, *sesewan* となり、語尾には *o* と *n* が交互に配置されている。このような押韻の繰り返しによって、詩歌は聞く人の耳から心の中へと容易にインプットされる。また、「津波」「地震」「雷」「稲妻」などの災害を「水浴びの水」「ゆりかご」「太鼓の音」「ともし火」という日常慣れ親しんだものに結びつけ語り継いでいくことによって、「災害が発生しても慌てることはない、何も恐れることはない」と、パニック状態に陥らないように諭している。

さらに「Smong」には、韻を踏む美しい詩歌に加え、心に残る美しいメロディーが備わっている。老人から子どもまで誰もが口ずさむ親しみやすい旋律である。旋律の盛り上がり部分とリフレイン部分では、「もしも強い地震が来たならば、海の水が引いて行ったならば、とにかくまずは高い所を探しましょう。自分達の身を守るために。」という歌詞の肝要な部分を伝えている。

その他、「揺れ動く地震に続いてやってきた、とてつもない大きな波。」「あっという間に」「村は海の底に沈んでしまいました。」など、わずか3フレーズで津波の惨状を描写している。また、「『とにかくまずは』高いところを探しましょう。」と危機が迫っていることを感じさせる。このことにより出来事を簡単に記憶できるのも「Smong」に見られる口承文芸の特徴の一つである。伝えられた者が自分の中でそのイメージを膨らませることにより、伝達事項が鮮明な記憶として残っていく。

「Smong」が100年以上もの長きにわたり語り継がれ、歌い継がれてきたことは偶然のように思える。しかし、口承文芸の手法という切り口でその特徴を抽出すると、長年にわたり語り継がれ歌い継がれてきたことは、偶然ではなく必然であったことがわかる。さらに考えると、地震・津波により多くの住民が犠牲になったという重い事実があった。大地震の危険や恐怖と向き合いながら、自分たちや自分に続く子孫たちの命をどのように守るか懸念に考えた末にたどり着いた結論が、災害文化として時を超え、空間を越えて語り継がれていたのは何ら不思議なことではない。「Smong」には「語り言葉」が用いられていることも一つの特徴として挙げられる。1907年の津波発生当時、人々にとってわかりやすく理解しやすい語り言葉は、情報を正確に伝えるための生命線だったに違いない。大切に

資料1 Smong

Smong (作詞 Moris Messasilae)	Smong (日本語訳 高藤洋子)
原語はシムル語 () 内はインドネシア語	
Smong dumek-dumek mo (tsunami air mandimu)	津波・・・それは君たちの水浴びの水
Linon uwak-uwakmo (gempa ayunanmu)	地震・・・それは君たちのゆりかご
Elaik keudang-keudangmo (petir kendang-kendangmu)	雷・・・それは君たちの太鼓の音
Kilek suluh-suluhmo (halilintar lampu-lampumu)	稲妻・・・それは君たちのともし火
Enggel mon sao surito (dengerlah suatu kisah)	さあ、皆さん 話を聴きましょう。
Inang maso semonan (pada zaman dahulu kala)	むかしむかし、
Manoknop sao fano (tenggelam suatu desa)	海の底の村で
Uwilah da sesewan (begitulah dituturkan)	語り継がれた話です。
Unen ne alek linon (gempa yang mengawali)	揺れ動く地震に続いてやってきた
Fesang bakat ne mali (disusul ombak raksasa)	とてつもない大きな波。
Manoknop sao hampong (tenggelam seluruh negeri)	あっという間に
Tibo-tibo maawi (secara tiba-tiba)	村は海の底に沈んでしまいました。
Angalinon ne mali (jika gempanya kuat)	もしも強い地震が来たならば
Oek suruk suali (disusul air yang surut)	海の水が引いて行ったならば
Maheya mihawali (segeralah cari tempat)	とにかくまずは高いところを探しましょう。
Fano me senga tenggi (dataran tinggi agar selamat)	自分達の身を守るために。
Ede smong kahanne (itulah smong namanya)	この Smong と名付けられた (津波の) お話は
Turiang da nenekta (sejarah nenek moyang kita)	私たちのご先祖様から聞いたお話。
Miredem teher ere (ingatlah ini semua)	よく覚えておきましょう。
Pesan navi-navi da (pesan dan nasihatnya)	この言い伝えを守りましょう。

※「Smong」の歌詞および訳詞の無断転載をお断りいたします。

引用の際には必ず出典を明記ください。

受け継がれてきた語り言語は美しく洗練され、伝達すべき情報を聞き手に容易に伝えることができた。こうして「Smong」の言い伝えはシムル島全島に広まっていった。

さらに特筆すべきことは、「Smong」を伝える際には、必ず当時の地震や津波の様子が併せて語られていることである。話は以下のように緊迫感を持って伝えられた。

「激しく揺れる地面、近くの海に目をやると、見ている間にどんどん引いていく海水、そして次にやってきたのは押し寄せる巨大な黒い壁のような大波だった。とてつもない速さで迫ってきたその大波は、あっという間に村を飲み込んでしまった。大波は何度も引いては押し寄せる。大波はすべてのものを持って行ってしまった。そして多くの者が犠牲となった。」「その大津波で丘の上に立つ大木の枝には大きな魚がひっかかり、何日もそのままだった。」「海の底にあるサンゴ礁が田んぼの真ん中まで押し流され、今もそのままになっている。」100年もの間、皆が忘れずに語り継ぐことができたのは、このように「Smong」が「押韻」の手法を備えていたこと、わかりやすく理解しやすい「語り言葉」を用いていたこと、そして「緊迫感、臨場感ある語り」によって伝えられてきたためである。

シムル島に伝わる代表的な伝統文化としては先に述べた「Nandong」の他に「Nanga-nanga (ナンガ・ナンガ)」と「Sikambang (シカンバン)」が挙げられる。

「Nanga-nanga」は、古くから伝わる鎮魂歌(レクイエム)であり、哀調を帯びた詩歌である。1907年の地震および津波発生時に犠牲となった多くの人々のための「Nanga-nanga」が数多く残っている。大切なものや人を失った時、また何らかの災難に遭った時に詠われる「Nanga-nanga」は、2004年の地震、津波が発生した時にも多く歌われた。島民たちは再びやってくるかもしれない津波と余震に慄きながら丘の上に設置されたテントの中で避難生活を送った。そのような状況の中で歌われたのが「Nanga-nanga」だった。避難所は電気も明かりもなく夜になると真っ暗だった。陽に照らされ雨に打たれつつもそこで命をつないだ。その様な緊迫した毎日の中でも、島民たちは自分たちが大切にしてきた「Nanga-nanga」でお互いを励まし合い、自分の心を慰めた。毎晩あちらこちらのテントから「Nanga-nanga」の旋律が聞こえてきたという。何もかもを失った人々の中に残ったのは愛する者への想いと古くから伝えられた島の口承文芸だった。**資料2**にスマトラ沖地震津波の際に歌われた「Nanga-nanga」の一例を挙げる。

資料2 Nanga-nanga

「Nanga-nanga」	(日本語訳 高藤洋子)
Anak kepiting	子蟹が海岸に沿って
Di pinggir pantai	歩いている。
Jalannya	ヨタヨタしながら
Miring-miring	歩いている。
Mau menanak nasi	ごはんを炊きたくとも
Tidak ada beras	米がない。
Mau menggulai	煮込み料理を作りたいくとも
Tidak ada garam	塩がない。

※「Nanga-nanga」の歌詞や訳詞の無断転載をお断りいたします。

引用の際には必ず出典を明記ください。

「Sikambang」は、シムル島独特の伝統舞踊である。それは男女一組の踊り手によって舞われる。男性の踊り手は傘を持ち、女性の踊り手はスカーフを手にして舞う。この舞踊はスマトラ島リアウ州のマレー族の伝統舞踊「Tari Payung（タリ・パユン 傘踊りの意）」に似ているが、大きな違いは「Sikambang」ではシムル島独特の四行詩「Pantun（パントウン）※²」が歌われていることである。韻を踏む美しいそのメロディーは、「Smong」同様、人々の記憶から離れ難く、世代をこえて受け継がれた。

シムル島を代表する上記三つの伝統文化「Nandong」、「Nanga-nanga」、「Sikambang」にも見られるように、シムル島の人々は言葉を単に「メッセージを伝えるもの」としてとらえるだけでなく、それらを後世に残していけるように、シンプル且つ記憶しやすいよう工夫した。人々は災害をどう見据え、災害とどのように向き合い、災害をどのように乗り越えようとしたのか。島民たちは地震、津波、落雷など、思いがけない災害が発生する度、その状況やその時々気持ちを「Nandong」や「Nanga-nanga」などで表現し、自分達や周りの不安を和らげるとともに、苦しみや悲しみから立ち直ろうとした。この島において災害と伝統文化は密接にかかわっていることがわかる（高藤 2013）。

【アンケート】「Smong」を誰から教わりましたか？

シムル島の人々の防災意識、また「Smong」に対する関心を知るために250人のシムル島住民にアンケート調査を行った。返送数は207名（回収率82.8パーセント）であり、回答者の年代、職業、性別の内訳は表1のとおりである。

全体の73パーセントが両親、または祖父母から教わっていた。このことは「Smong」が家庭内で代々、語り継がれてきたことを意味する。また、震災後に島外から支援に来たNGO関係者からは、「震災後に何らかの形で『Smong』を教わった」との回答を得ている。子や孫のために親や祖父母が伝承する傾向が強いと考える。家族のうちで年齢が高いほど、いろいろな被害経験をしていることが知られている。伝承の方法は祖父母や両親を通して各家庭で伝承されていた。2004年以降はさら

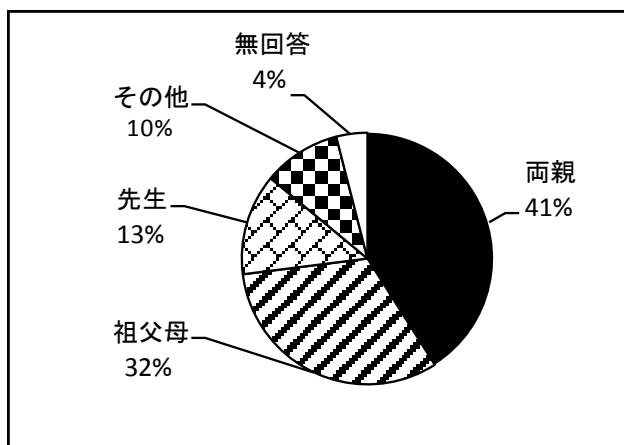


図2 「Smong」を誰から教わりましたか？

(単位：人)

		両親	祖父母	先生	その他	無回答
教育庁職員	55	16	24	13	2	0
小学校教職員	35	11	15	8	1	0
漁業従事者	26	17	8	1	0	0
農業従事者	19	10	6	2	0	1
商業従事者	16	11	4	0	0	1
観光事業者	17	12	4	0	0	1
NGO関係者	25	5	4	2	11	3
その他	14	2	2	0	7	3
合計	207	84	67	26	21	9

表1 「Smong」を誰から教わりましたか？

に伝承方法は幅広くなり、学校で先生から教わったり、村の集会の際に歌われたりすることで語り継がれており、今なお普及が続いている。

2-2 バンダアチェ

聞き取り調査によればアチェ州では、2004年の地震津波以前に発生した大きな地震と津波は4回起きている。2004年の前はシムル島沖を震源とした1907年の地震津波である。

アチェでは、津波は「Ie Beuna (イブナー)」と言われていた。しかし、この「Ie Beuna」という言葉を知っているのは一部の年配者だけで、若い世代の人のほとんどが「全く知らなかった」と回答した。調査の結果、「Ie Beuna」の意味はアチェ語の日常語に由来することが判明した。「Ie」は「水」を意味する。「Beuna」には二つの意味があり、「必ず起こる」或いは「必ずある」、またもう一つの意味は「確かに」「間違いない」という意味である。また、聞き取り調査の結果から、その他の別のアチェ語の意味があるということも判明した。「Ie Beuna」は「海の沖から来る危険な水」と回答した人もおり、ヒアリング調査によるとその水はヤシの木の高さに相当するとのことだった。そのほか、「海の魔物の水」との回答もあった。この「Ie Beuna」は大変な速さで近づいてくるとも言い伝えられてきた。

2004年のスマトラ沖地震津波発生の際にはバンダアチェで多くの被害者がでた。大津波によってバンダアチェの陸に打ち上げられた発電船については当時、頻繁に報道されたが、2011年にはその周辺が震災遺構の公園（メモリアル・パーク）となり、国内外から多くの人々が訪れている（写真4）。さらに2012年にはこの公園内に新しい時計台のモニュメントが建てられた。津波発生の時刻が記された時計台に犠牲になられた方々の名前が刻まれている。その後ろの銅板には津波の様子が描かれている。これは地域の住民たちの要望によって建てられたものである。地域の人々の意向が反映され、銅板の絵には犠牲者の姿は描かないように配慮された（写真5、写真6）。聞き取り調査によって、「2004年の地震発生の際に何が起こったのか」という事実と歴史を後世に伝えたい。災害に備えてほしい」という地域の人々の気持ちがモニュメントに表現されたことが判明した。災害経験とその教訓を風化させないよう努力しているバンダアチェの人々の防災意識を感じた。



写真4 震災遺構「陸に打ち上げられた発電船」とその周辺はメモリアルパークとして整備された。



写真5 震災メモリアルパークに建てられた時計台



写真6 震災メモリアルパークの銅板に描かれた津波の様子

2004年のスマトラ沖地震津波発生後、バンダアチェには災害経験伝承と共に震災遺構、或いはモニュメントを通して次世代へ災害に関するメッセージを受け継いでいこうという動きが多くみられる。時代の流れと共に災害経験伝承の受け継がれ方が変化しているともいえよう。震災遺構を残すか残さないか、日本国内においても賛否の分かれるところであるが、インドネシアの人々は記憶すべきこと、伝承すべきことは遺構として保存するが、人々の苦しむ様子、つらい記憶までは残したくないとの思いがあったのではないかと推察している。

2-3 シンキル

シンキルは2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震津波、またその余震である2005年3月28日に発生したニアス島沖地震で大きな被害を受けている。この地域には、シンキル・ラマ（旧シンキルの意）は過去に起きた津波被害によって街そのものが海底に沈んでしまったという言い伝えが残っていた。シンキル・ラマはシンキル・バル（新しいシンキルの意）の街から小舟に乗船すること約45分の場所に位置しているが今では無人島と化している。シンキル・ラマの街がいつ海底に沈んだかという正確な記録は残っていないが、モハマッド・サレーの自伝 *Riwajat Hidoep dan Perasaan Saja* (1965) によれば、19世紀半ばまでシンキルの街は交易の中心地であったとの記述が残っている。この地域には地震の発



写真7 シンキル・ラマへの調査は小舟をチャーターして実施した。



写真8 今では無人島となったシンキル・ラマ



写真9 コミュニティが存在したところのシンキル・ラマの名残（住居の土台と伝承されている）



写真10 かつてシンキル・ラマに人々が暮らしていたことを物語る遺物（調査時に採集したもの）

生にともない海の水が上昇する「Galoro（ガロロ・津波の意）」という言葉が残っていることも記録されていた。「Galoro」発生後、シンキル・ラマの住民の多くがクアラシンキルの河口から避難したと言われている。

住民へのアンケートおよび聞き取り調査をまとめると、「シンキル・ラマの街は地震後に発生した『Galoro』（大きな波）によって無くなってしまった」という回答が多くみられた。「誰から聞いたのか」という問いに関しては、「親から聞いた」という回答が大半を占めていた。住民たちはまた「『Galoro』という言葉が『津波』を指すということを2004年のスマトラ沖地震津波の発生後に初めて知った」とも答えている（写真7～写真10）。

3. 北スマトラ州

3-1 ニアス島

ニアス島はスマトラ島北西部沖のインド洋上に位置する島で北スマトラ州に属する。サーフィンの国際大会も開催されたことがある西南部地域の高波は有名であるが、2004年に発生した地震津波以降は、地震発生に伴う隆起により珊瑚礁や砂浜が海面上に姿を現し形成された離水海岸となったところが多い（写真11）。このため波は以前ほどサーフィンに適さなくなったといわれている。

ニアス島は2004年12月26日のスマトラ沖地震、そして、そのわずか3ヶ月後の2005年3月28日に発生した地震によって甚大な被害を受けている。構造物の多くは建物の重量が大きい割には柱が細いなど耐震性の問題があり、非常に厳しい被害状況に至ったと報告されている。ニアス島の文化として知られているのは、高床式の木造伝統家屋群(Omo Hada)であるが、これらの伝統家屋は耐震性に優れていると実証されている。地震後、山間部の集落で近代的な新築家屋が全壊しているすぐ近くで、築300年になる



写真11 スマトラ沖地震発生に伴う隆起により珊瑚礁や砂浜が海面上に姿を現し形成された離水海岸



写真12 ニアス島南部に残る伝統家屋



写真13 ニアス島に残る石文化・儀式や祭壇として用いられた石造物（南部ニアス・ゴモ近郊）

伝統家屋はそのまの姿を残していたことが非常に印象に残った。ニアス島の人々はこれこそが先祖から引き継いだ防災対策だと伝統家屋に誇りを持っているが、その伝統家屋をつくるだけの大きな木材が島に無くなってしまったことと伝統家屋を建築する担い手がないことが深刻な課題となっている（高藤 2010）（写真12）。文化的な面からみるとインドネシア国民の約90パーセントがイスラム教徒である中、ニアス島は島民の約80パーセントがキリスト教徒であることが特徴で村々には必ず教会がある。多くの教会は築50年以上経っているが、屋根の作りが軽量なため倒壊を免れたと専門家は指摘している。災害発生の際、地域の教会は地域内の被災者に支援を行うという重要な役割を果たした。

本研究では、ニアス島において先祖代々伝わる石文化の存在も明らかにした。その石文化は情報を伝えるツールでもあり、古くから生活様式や儀式、法律等を伝授してきたことを見出した（写真13）。

2004年および2005年以前にニアス島において発生した地震としては1674、1851年、そして1883年クラトウ火山の爆発による地震と津波、その後1907年に発生した地震があり、これらの災害はニアス島に多くの犠牲者をもたらしたといわれている。先ほども述べたように、人々の防災意識はニアス島の伝統家屋に集中している。1980年代初め、高波を求めて外国からサーフィン目当ての観光客が押し寄せ、観光開発が盛んになったことから、住民は海岸線沿いに休憩所、レストラン、宿泊所、そして自分達の生活のための家々も建築するようになり、海岸線沿いには多くの近代的な新築家屋が建てられた。住民たちは、地震、津波の際に大きな被害をもたらしたのは、これらの家屋に耐震性がなかったからだと認識している。

ニアス島には災害経験伝承や言い伝えが数多く残っている。災害経験伝承がなされる背景には、地震や津波により多くの住民が犠牲になったという重い事実がある。ここではニアス島で収集した災害に関する伝承をまとめ、伝承の背後にある人々の意識を探りたい。

ニアス島における伝承として代表的なものは「"Hulo soloya-laya"フロ・ソロヤ・ラヤ（ニアス語で『動く島』の意）」である。調査により、「Hulo soloya-laya」の言い伝えは、1907年に発生した大地震に由来しているということが判明した。その内容は、「ニアス島では約1週間強い揺れが続き、台所で炊事ができないほどであった。子どもたちのパニックを和らげるために、木と木との間に布をかけハンモックをつくり子ども達をそこに寝かしつけた。子どもたちは余震なのかハンモックによる揺れなのかわからなくなり泣き叫ぶことをやめ笑顔になった。」というものであった。

また、「Hulo Wunga」の伝説、「白い大蛇」など蛇にまつわる伝承が挙げられる。「Hulo Wunga」は、Wunga島が地震によって沈んだという伝説で、今でも肉眼でその島を海面下に見ることができる。ただし、地震、津波が原因で沈んだかどうかは立証されておらず伝承としてのみ残っている。白い大蛇の話はニアス島創世記神話が基になっている伝承である。神話によると、ニアス島は三つの世界から成り立っているという。それはすなわちロワランギという神が支配する天上界、今自分達が住んでいる中界、そしてラトゥレダヌが支配する地下界である。中界はラトゥレダヌが支えているが、天上の神、ロワランギの妻であるナザレタによって大地を支えていた輪が白い大蛇に変えられてしまっから、ニアス島に地震や津波が起こるようになったと言われている。その白い大蛇が、脱皮する際に揺れ動くのが地震、脱皮の際に喉の渇きをいやすために海水を飲みこむのが引き波、それを再び吐き出す時に起こるのが津波だという神話である。また、人間が正義に反した行いをするとその大蛇が怒る。大蛇が身をくねらせると島が動く、すなわち地震が起こるといふ言い伝えもあった。

その他、ニアス島を机に例えた伝承もあった。あまりにも地震が多発したため、四脚ある机の支えのうち三脚が折れてしまい、今のニアス島は残りの一脚だけで支えられているようなものだとの言い伝えである。そのため、2004年、2005年の地震、津波の際には多く

の人々が島を離れ、対岸のシボルガ（スマトラ島）に渡って行ってしまおうという現象もあった。これが一時ニアス島の人口が減少した理由の一つである。

このようにニアス島には地震や津波に関する神話や伝説が残っているが、その中では地震や津波の由来は語られているものの、話の中には災害発生時に具体的に身を守るための方法は語られていない。またその言い伝えが語られる時にも、実際に地震や津波が起こった際にどのようにして身を守るかなどは教わらなかった人が多いことがわかった。さらにアンケートや聞き取り調査の結果、ニアス島において地震・津波に関する避難方法や対処法の語り継ぎが普及しなかったのは、地震や津波などの災害を話題にすることは、「再びその災害を呼び起こすことになる」との理由からタブーとされてきたことに原因があることが判明した。しかし2004年の災害後は、災害の話を控えるべきだというタブーもなくなった。アンケート結果からは、むしろ、自分達の体験を語り継いでいくことこそ大切であるという意識の変化がみてとれた。

3-2 バルス

バルスはスマトラ島の西海岸に位置する街で北スマトラ州中央タパヌリ県に属する。今では静かで小さな港町となっているが、その歴史は非常に古く、紀元前より良質なバルスの樟脳や金をもとめ多くの国々からの船と商人たちがこの港町を訪れた。外国からの交易に伴いイスラム教もこの地より広く各地へ普及したとも言われている。考古学者にとってもこの地は学術的に貴重な街で特にバルスや近郊のロブトゥアではインドネシアとフランス人考古学者Claude GuillotやMarie- France Dupoizatらのチームによって様々な調査や研究が進められた。

バルスには多くのイスラム史にまつわる遺跡が存在しているが、よく知られているのは215もの墓石が存在するMahligai Tinggi（マリガイ・ティンギ）という墓地である（写真14）。また、それと同時に最も多くの人々が墓参するのがPapan Tinggi（パパン・ティンギ）といわれている墓石であり当該地域でも特別な場所とされている。その墓は7メートル近くもあり、地域住民からの聞き取り調査によると、古代の人々は5メートルもの身長があったと言い伝えられている（写真15）。墓石はおよそ700段の石段を上りつめた海拔およそ200メートルの高台に建っている。そこからの眺めは見事で、広大なインド洋、中央タパヌリ県全域からアチェ州シンキルまでの景色がパノラマのように広がっている（写真16）。なぜこれ程まで高い位置にこれらの石を運ぶことができたのかは未だ明らかにされていないが、その墓地が砂地にあるためこの辺り一面は海岸であったと言い伝えられている。バルスやロブトゥアから南北にむかっただけの地域及びその周辺にはこの他にも多数のイスラム指導者の歴史ある墓地が点在している。

歴史をひも解くと、9世紀中期に南インド或いはスリランカからの商人の交易で栄えていたバルスの街が12世紀には忽然と姿を消したかのようにその記録が途絶えている。バルスの名が再び歴史に刻まれるのは16世紀になってからのことである（Claude Guillot 2008）。

またLobu Tua, Sejarah Awal Barus（2002年）の中でClaude Guillot氏は「Gergasi（グルガジ・巨人の意）」と呼ばれる未知の集団によって地域が破壊したと主張している。その集団は海賊であったとも言われているが定説はない。時の流れとともにいつしかバルスの人々の間では「Gergasi」が海から来た恐ろしい巨大な鬼のことであるという物語が流布されるようになった。着目すべきはアンケート調査の中で回答者の多くが、「伝承している『Gergasi』すなわち『海から来た巨人』は津波を意味する」と答えていたことである。12世紀にバルスの街や当該地域を荒廃させた「Gergasi」は津波の象徴だったのだろうか。メダン考古学研究所によれば、12世紀初期から16世紀にかけてこの地域の考古学的なオブジェクトが見つからないという。



写真14 Mahligai Tinggi (マリガイ・ティンギ) 墓地



写真16 Papan Tinggi (パパン・ティンギ) 墓地からの眺め



写真15 Papan Tinggi (パパン・ティンギ) 墓地

1995年から1998年にロブトゥアで実施された発掘調査に参加したインドネシア国立考古学研究センターの考古学者Sony Wibisono氏によると、古代遺跡のほとんどは1メートルほどの海砂の層から発掘されたという。さらに建物であったと思われる石の遺跡は海岸より2キロ離れた所で発掘された。またインドネシアの海岸研究所において津波研究に従事しているWidjo Kongko氏やケント州立大学Katrin Monecke氏ら5人の研究チームは、2007年から2008年にかけて西アチェ県ムラボアのSuok Timahにある100箇所の沼地を掘削した。海岸から2キロ離れた所で過去に巨大な津波によって形成された土壌層位を発見した。放射性炭素年代測定法によって分析した結果、当該地域で発生した津波は780年から990年の間に1回と1290年から1400年の間に1回発生したと推定された。Widjo Kongko氏によれば、「ここ1000年の間で、スマトラ島西海岸では2004年に起きた巨大津波と同じような規模の津波が、少なくとも三回発生したと考えられる」(KOMPAS Sabtu, 26-05-2012)。

1290年から1400年に当該地域で発生したと推測される大津波と、バルスのロブトゥアにおいて栄えた文明が消えた時期とを関連付けると伝承が示唆するものが見えてくる。その他、この地域一帯には「Raksasa (ラックササ)」と言われた巨人が出没し街を荒らしていったと伝えられており、指導者の墓だけを残し、とてつもない力で山を一掃したと語られている。一節にはこの「Raksasa」は津波ではなかったかと言われている。この「Raksasa」は「Garolo (ガロロ)」とも言われており、バルスを始め北スマトラの西海岸一帯の伝統文化である「Talibun (タリブン)」の中でも表現されている。「Talibun (タリブン)」は楽器などを一切使わず、口承されてきた四行詩である。その中でも災害経験の教訓を伝える歌詞を見出すことができる。今でもバルスやロブトゥアなどの北スマトラの

西海岸では大きな波、即ち津波のことを「Garolo」といい、「Talibun」の中で地震が起こった際に避難を促している歌詞をみることができる（資料3）。

また聞き取り調査によると、「2004年12月のスマトラ沖地震津波発生の際にバルスが大きな被害に遭わなかったのは、7人のイスラムの聖人が沖で両手を広げ、バルスの街に津波が入ってこないように守ってくださった。そのおかげでバルスは被害が少なかった。」とも言い伝えられている。この地域ではイスラムの聖人にまつわる津波伝承も多く聞かれた。

資料3 Sikambang Talibun

中央タパヌリ県バルスの伝統文化「シカンバン」の中の「タリブン」

<p style="text-align: center;">Talibun</p> <p style="text-align: center;">原語はミナンカボウ語</p>	<p style="text-align: center;">Talibun</p> <p style="text-align: center;">（日本語訳 高藤洋子）</p>
<p>1.</p> <p>Jajak di kabur gadang pasang</p> <p>Gadang pasang ombaknya lapeh</p> <p>Jangan menghampiri tapi-tapi</p> <p>Pasi badarai galamai punting malareh</p>	<p>砂浜に残る足跡も</p> <p>一瞬のうちに消えてしまうような大きな津波がやってきたら海岸には決して近づかないようにしましょう。</p>
<p>2.</p> <p>Rumbio di tanah lapang</p> <p>Di rangkuh anak batang Jati</p> <p>Gampo galoro akan datang</p> <p>Basiap kito pai lari</p>	<p>海岸のサゴヤシや</p> <p>水に強いチークの木を集め備えましょう</p> <p>いつも地震と津波に注意しましょう。</p> <p>すぐに逃げられるように備えましょう。</p>
<p>3.</p> <p>Jangan balari-lari bana</p> <p>Liek kabawah urek kayu</p> <p>Jangan tadorong-dorong bana</p> <p>Kana kan anak yang sedang tidu.</p>	<p>避難するときにはパニックに陥らないようにしましょう。足元をよくみて逃げましょう。</p> <p>人を押さないようにしましょう。</p> <p>素直に寝ているこの幼い子供たちに伝え命を守りましょう。</p>

原文資料提供：Syahrul GeaおよびTanwir Marbun

※「Talibun」の歌詞および訳詞の無断転載をお断りいたします。
引用の際には必ず出典を明記ください。

4. 西スマトラ州

4-1 パダン

パダンはインド洋に面する西スマトラ州の州都である。当該地域はミナンカボウ族独特の伝統家屋である高床式のルマ・ガダンが特に目を引く存在である。今では新しく建てる人が少なくなり、希少価値のある伝統家屋となっている（写真17）。

パダンで多くの人に知られているのは「Malin Kundang（マリン・クندان）」という名の青年が主人公の民話である。その民話の内容は、「貧しいMalin Kundangが収入を得るために家を離れ奉公に出る。何年かのち交易で成功したMalin Kundangは豪華な船に乗り立派な身なりをして故郷へ戻る。故郷では年老いた母親がMalin Kundangの帰りを待ちわびていた。船が寄港したところへ現れた貧しい母親が我が子Malin Kundangに近づくのを見て、Malin Kundangは「自分の母親ではない」と偽る。その言葉を聞き、豹変してしまったわが子に深い悲しみを抱いた母親は、神に『これが本当に我が子ならこの子を石にしてください。』と言った。神はその言葉を聞き入れた。まもなく船は故郷を離れ出航することになるが、ほどなくして津波に遭い船は転覆しMalin Kundangは波に吞まれてしまう。その波が引いた後に残ったのが、その時の船の残骸と石になってしまったMalin Kundangである」という話である。今でも海岸にはその伝承に由来する岩が残っている。神に許しを請う石になったMalin Kundangの姿を通して多くのインドネシアの人々が、「親に嘘をつくことはよくない行為であり、親孝行をしましょう」という教訓を伝承している（写真18、写真19）。この民話は宗教的な教訓としての意味合いが濃いとされており、インドネシア各地で絵本や児童書として出版されている。また多くの家庭で親から子へ語り継がれてもいるが、実はその民話の中では津波の起こる前兆や高台に避難することを促す場面がある。引き波によって海水が干上がった海岸線を見て、Malin Kundangが地域の人々に「すぐに海の水がこの土地を飲み込んでしまうだろう。早く高台に逃げなさい。」と避難を勧告したにもかかわらず、外来者の言うことをなかなか信じないミナンカボウ族の気質もあったのか、その忠告に耳を貸さなかった多くの人が命を落したことが語られているのである。



写真17 ミナンカボウ族の伝統家屋「ルマ・ガダン」



写真18 「石になってしまったMalin Kundang」神に許しを請う姿と伝承されている。



写真19 Malin Kundangが寄港したと伝承されている海岸（パンタイ・アイル・マニス）

5. ブンクル州

5-1 ブンクル

ブンクルは17世紀にイギリス東インド会社によって栄えた土地である。イギリス東インド会社はブンクルに胡椒の取引所をつくり交易を進めた。ブンクルに現在もその当時の姿のまま残るマールポロ要塞は英国時代の遺産の一つである（写真20）。

この地にも地震と津波に見舞われた伝承が残っている。アンケートと聞き取り調査の結果、「イギリス人は当時この地を「Bencoolen」或いは「Coolen」と言っていたが、それは、英語の「切り刻まれた土地」或いは「バラバラに壊れた土地」の意味となる「Cut Land」に由来するという伝承が残っている。土地がバラバラに壊れてしまうほどブンクルの地は何度も地震に見舞われたと言い伝えられている。



写真20 マールポロ要塞

6. ランプン州

6-1 バンダルランブン

クラカトウ火山は1883年8月に噴火を起こし爆発している。この噴火は甚大な被害をもたらし、噴火によって発生した津波では約36,000人が命を落としたとも言われている。2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震津波以前では、インドネシア国内最大の災害である。

古代ジャワの書物Pustaka Raja Parwaにはそれより以前のクラカトウの噴火についての記載があり、人々はその内容について今でも語り継いでいる。

アンケートおよび聞き取り調査の結果で得られた伝承をまとめると以下の内容となる。

「バトゥワラ火山から大きな爆発音が聞こえると同時に、地面が大きく揺れ、突然の闇に包まれまれ、雷と稲妻が立て続けに起こった。激しい雨と大嵐が続き、世界中を闇に包んだ。バトゥワラ火山からは泥流が発生し、東側に位置するカムラ火山に向かって大変な勢いで流れてきた。大洪水がジャワ島を飲み込み、ついに島が二つに割かれた。ウジュンコロロンでは海岸線から15メートル離れた土地まで浸水した。住民はその後数日間、太陽を見ることができなかった。その噴火による津波は遠くハワイ、アメリカ西海岸、そして離れた中東にまで達したといわれている。」

ランプン州の州都バンダルランブンの中心地には祈念モニュメントが建てられている（写真21、写真22）。ランプンでは現在も毎年8月にはクラカトウ火山噴火の犠牲者を悼み、またこれからの災害に備えようとの意向から祈念式典が開催されている。



写真21 パンダルランブンに建つクラカトウ火山噴火祈念モニュメント

写真22 クラカトウ火山噴火祈念モニュメントに描かれた噴火の様子

7. 考察 ―各地の災害経験伝承から見えてきたこと―

ここでは、地震津波の常襲地として知られるインドネシアのスマトラ島西海岸（インド洋沿岸）およびその周辺諸島の地域社会における津波災害に端を発し、それとかわりあいながら存続している災害経験伝承に関するフィールドワークの結果に基づいた考察を述べる。これは冒頭にも触れたとおり、自然と共に生きてきた先人の知恵についての考察ともいえる。

自然と共生していく中での知恵の一部として存在していた災害経験伝承は、その地域に住み着くことによって受け継がれ日常的な生活の文化の一部となった。インドネシアについて見ていくと、住民が暮らす土地に結びついた生産を生業としている人々は、自然との共生について身を以て学び、それを記憶し代々伝えている。住民にとって自然は恵みであり、時として災害の原因となる自然も受動的に考え共生してきた。自然と寄り添って生活している人々は、常に自然と向き合っている。そのため彼らは不自然な現象に敏感であり、自然に対する恐れをおろそかにしない。災害が頻発し、近親者や友人を亡くす、また家財や家屋の流失などの被害に遭遇すると、その地域では他地域には見られない、災害に関する特有の行動様式が形成され、かつ継承されていくことになる。そこには自然と対峙することでなく、共生する姿勢が根底にあるように思われる。

元来、スマトラ島西海岸に住む人々の住居は海岸から離れた場所にあったという伝承も残っている。スマトラ島西海岸の街は川の上流にあったとされている。これは恐らく先人の知恵だったのであろう。しかし時代が流れオランダやイギリスなどから海を渡って人が移動してくることによりその地域の人々も海岸の近くに移っていったという。特にパダンやブンクルではこの傾向がみられる。

一方、同じ被災地でありながら災害経験伝承がなされなかった地域もある。これには被災地からの逃避が原因としてあげられる。人の移動が起これ、経験がその地域で蓄積されず災害経験伝承として住民に受け継がれていくことにならなかった例がアチェ州のシンキル・ラマでみられる。ニアス島では「災害の話をする」と再び発生する」というタブーが伝承され、災害の経験自体は受け継がれることが少なかったことにも留意したい。バンダアチェやパダンなど比較的人の移動が激しい都市部では災害経験伝承がなされにくい傾向があった。新しい地へ移住した者がその土地の災害史を自ら積極的に学ぼうとすることは極めて少ない。周りに災害経験者がいないと災害への関心は低くなる傾向にある。ましてや災害経験伝承が将来の防災へつながるよう日常の生活の中に組み込まれることは難しく、災害経験の伝承はされにくい。他方、シムル島では住民の流出も少なく、今なお大家族で

暮らしていることも災害経験伝承がなされた一因となる。住民が災害経験伝承を肌で感じることができるのであろう。

各地での調査結果からは、コミュニティが自ら経験してきた災害現象をどのような過程で災害文化に変換してきたか、すなわち災害現象に対してどのように対処し、記憶してきたか、また継承することで減災につなげてきたかを見て取ることができた。インドネシアのスマトラ島インド洋沿岸各地のコミュニティが何世代にもわたって経験してきた災害現象をコミュニティの集合的記憶としてどのようにして、またどのような形として編集してきたか、さらにどのように継承しているかについても明らかにすることができた。そこからは各地域の災害経験伝承は風土の違い、また時代の違いがありながらも自然に対する人間の考え方が一致するという共通性が見出される。

先祖からのメッセージは地震や津波発生に備えての何よりの警告になっていると、災害経験伝承をなしている地域の住民たちは口をそろえる。住民たちの危機管理意識は災害経験伝承から生まれ、現在もなおその意識は脈々と住民の中に息づき語り継がれている。さらに2004年のスマトラ沖地震津波の際に命を守り、命をつなぐことができた住民たちには、同じ災害に遭っても最悪の事態は防げるという共通の意識が芽生えている。また、住民たちは自然が災害発生の前兆を警告してくれるものだとして了知している。津波堆積物の調査から過去の巨大津波の存在が明らかにされてきたように、災害経験伝承は過去の災害を知る手掛かりとなる。その中には防災に役立つ知恵が盛り込まれていることが多く、今後もし起こり得る災害を念頭に置いて日常生活を送るといった生活様式にヒントを与える。災害発生から経験則に基づく知恵が行動へ結実することで減災へとつながっていく。そのことは時代を超え空間を超え現在にも役立つものとする。

先人の経験、また地域や子孫を守るために蓄積してきた知恵や技術などを用いて災害から身を守ることは、これから後の時代、異なる地域へも積極的に伝えていくべきである。朽ちることのない防災の知恵とするためには、その知恵を日々の生活の中で、次世代へ伝承することの重要性を忘れてはならない。このことが本研究を通して発信する強いメッセージである。

災害経験伝承に関して今後の課題として留意したいのは、伝承内容の中には災害に関する普遍的な知識の観点から誤った情報が含まれていることである。その原因として地域の人々が被災した時の経験のみをそのまま伝えており、受け継いだ人々の記憶に残っているからだと考えられる。一例をあげるとシムル島の「Smong」の伝承では、海の水が引いた際に高台への避難を促しているが、津波は引き波の時に発生するだけではない。災害に関して正しい知識や対処法を伝えていくためには、伝承に専門的な知見を取り入れるべきである。

伝承は人間が編み出した「知」の結晶であり、それはいにしへの彼方より伝統に根ざしている。先人達のこの知恵をこれから後の時代、異なる地域にも積極的に伝えていくべきである。災害経験伝承は社会へ応用することにより防災に寄与することとなる。今なすべきことは災害経験伝承を守り、日常生活の中で活かし続けることで将来の減災へつなげていくことに尽きる。このことにより災害の記憶の風化を防ぐことができ、災害経験伝承は時間を超えた普遍的な防災技術となり得る。

8. むすびにかえて

「海域」「文化」「減災」という点をクロスさせた3年間の研究を振り返りながらまとめてきたが、日常の生活の中で受け継がれてきた災害経験伝承をさらに虚心に探求し、それを収集したうえで分析し、将来の減災や文化研究へつなげる努力を続けることの重要性にあらためて気づかされた。調査対象としたスマトラ島西海岸（インド洋沿岸）地域のみならずインドネシア各地にはまだまだ多くの災害経験伝承を採集する余地がある。本研究で

は問題提起の段階にとどまっているものが多くあることは認めざるを得ない。本研究を災害経験伝承と減災のさらなる解明につなげたい。さらにこれらの研究成果をどう持続的な発展へと結びつけていくかを併せて検討すべきであろう。

本研究を通して社会学的研究が防災にどのように貢献できるのかについて多くのムーブメントを創出するきっかけともなったように思われる。同時に地域の歴史や文化に根差した防災の手法を広く社会に発信することにもなった。各調査地において研究協力者の大学院生を中心に現地住民とともに共同調査や災害に関する言い伝えに関するワークショップを開催したが、このことにより本研究の成果は、より実践的で効果的な防災活動に活用できると確信した。今後、様々な自然災害のリスク軽減の取り組みに資することになるのではないかと期待している。

謝辞

研究や調査の過程では日本、インドネシア両国各方面の方々から多大なるご協力を得た。心から感謝の意を表したい。アンケートやインタビューに応じていただいた各地の方々を併せて深謝申し上げる。

補注

※1 シムル島で使用されている言語は大きく4言語に区分できる。Simeulue Timur (東部シムル) Simeulue Tengah (中部シムル) Teupah Selatan (南部トゥパ) 地区で使用されている Bahasa devayan (デファヤン語)、Simeulue Barat (西部シムル) および Salang (サラン) 地区で使用されている Bahasa Sigulai (シグライ語)、そして今ではほとんど話者がいなくなり危機言語となりつつある Bahasa Leukon (ルコン語) がある。Bahasa Leukon (ルコン語) は 島最北端のAlafan (アラファン) 地区で少数が使用しているのみである。これらの言語は全く異なるため、島民たちがお互いにコミュニケーションを図る時には島の共通語 Bahasa Aneuk-Jamee (アヌック・ジャメー語) 或いは国の公用語 Bahasa Indonesia (インドネシア語) を用いる。

※2 かけ (Sampiran) と心 (isi) の構造を持つ伝統的な詩形式。上句 (かけ) 二行で自然をうたい、下句 (心) 二行で恋心など人事をうたう四行詩タイプが用いられることが多い。一例を挙げると Dari mana datangnya lintah, dari sawah turun ke kali. (蛭はどこからやってくる、田圃から川へ下りてくる)、Dari mana datangnya cinta, dari mata turun ke hati. (恋心はどこからやってくる、目から心へ下りてくる)。などがそれにあたる。(佐々木重次 (2008) 「最新インドネシア語小辞典 第1.3版」 Grup sanggar p218より)

※ 「Smong」 「Nanga-nanga」 「Talibun」 の歌詞および訳詞をはじめ、図や文章また写真の無断転載をお断りいたします。引用の際には必ず出典を明記ください。

※ 掲載写真：筆者撮影

《参考文献》

【日本語 文献 (50音順)】

小沢俊夫 (1978) 『世界の民話 25 解説編』 ぎょうせい PP.31~32.

高藤洋子 (2013) 「災害経験伝承が防災教育に果たす役割ーインドネシア・シムル島における事例を通じてー」 社会貢献学会 社会貢献学研究 第1巻 第1号 PP.11~14、17~19.

高藤洋子 (2012) 「災害経験を語り継ぐ防災教育の実践ーインドネシア・ニアス島の事例を中心にー」 立教大学アジア地域研究所 P.4.

マックス・リュティ (小沢俊夫 訳) (1968) 「ヨーロッパの昔話ーその形式と本質」 光明社 PP.7~144.

【インドネシア語 文献 (アルファベット順)】

A.A.Navis (1994) “Cerita Rakyat Sumatera Barat : Malin Kundang Anak Durhaka”
Grasindo,

Claude Guillot編 (2002) “Lobu Tua, Sejarah Awal Barus” Yayasan Obor Indonesia

Claude Guillot, Marie-France Dupoizat, Untung Sunaryo, Daniel Perret, Heddy Surachman, Atika Suri Fanani (Translator), Mohamad Ali Fadillah, Sugeng Riyanto, Ludvik Kalus, Sonny Ch. Wibi-sono (2008) “Barus 1000 Tahun Lalu” Kepustakaan Populer Gramedia

Muhammad Saleh gelar Datuk Orang Kaja Besar; S M Nasaruddin Latif (1965) “Riwajat hidup dan perasaan saja” Dana Buku Moehammad Saleh

Prasetyo Eko P/ Ingki Rinaldi /Ahmad Arif /Agung Setyahadi (KOMPAS Sabtu, 26-05-2012) Tanah Air “Gergasi, Tsunami dari Samudra Hindia” KOMPAS P.11、P15.